

胃ろうにする？しない？ 「心のふたがとれた」とき

佐藤陽 2017年2月9日16時08分



患者の胃ろうチューブを交換する赤羽重樹医師（左）と様子を見守る妻。1カ月～半年ごとに交換が必要という＝横浜市神奈川区

■ 老いの現場を歩く:3 (マンスリーコラム)

神奈川県版の連載「迫る2025ショック」の取材で最も考えさせられたのが、口から食べられなくなった患者の家族が、胃ろうをつけるかどうか悩んだプロセスを描いた「胃ろうの選択」（2014年9月掲載）だった。取材しながら、常に「自分自身なら……」「自分の親なら……」ということを考えていた。

胃ろうは、加齢や脳梗塞（こうそく）などの後遺症でのみ込み（嚥下＝えんげ）機能が落ちて食べられなくなった患者向けに、胃に直接穴を開けチューブで栄養を入れる方法だ。全日本病院協会の10年度の推計によると、全国の胃ろう造設患者数は約26万人。元々は、障害のため口から食べられない子どものために開発された人工栄養法だった。日本では、介護保険が始まった00年前後から高齢者に急速に使われるようになった。鼻からチューブで栄養を入れる方法などに比べ患者の不快感が少なく、長時間使用できるメリットがあるからだ。

ところが「平穏死」「自然死」をテーマにした書籍が話題になった10年ごろから、「老衰で死期が迫っている患者に安易に造るケースがある」などと批判が高まってきた。一方で胃ろうにして栄養補給しながら、のみ込みの訓練をすれば、口から食べられるようになる可能性もある。

一度つけた胃ろうは、口から食べられるようにならない限り、外すことは極めて難しい。栄養が摂取できなくなれば、死に直結するからだ。ただ将来、口から食べられるようになるかどうかの予測は医師でも難しく、患者・家族は選択に悩むことが多い。

連載の取材で私は、悩んだ末に胃ろうをつけた家族と、つけなかった家族の両方に取材することができた。その二つのケースを紹介したい。

■ 「夫婦の時間、取り戻せた」

まず、胃ろうをつけた家族のケースから――。横浜市神奈川区に住む大垣佐智子さん（81）は、胃ろうをつけた夫、進さん（享年82）を約3年半にわたり在宅介護した。

進さんは、こんな経緯をたどって胃ろうをつけた。02年から脳梗塞（こうそく）などで入退院を繰り返していたが、09年に誤嚥性（ごえんせい）肺炎で入院した。のみ込む力が落ち

ると、食べ物や水分が食道ではなく気管に入ってしまう。その際、胃液や唾液（だえき）とともに、細菌も肺に流れ込み、炎症が起きてしまうのだ。

退院時に病院主治医から「このままだと肺炎を繰り返して大変です。在宅に戻るなら、胃ろうにした方がいいと思います」と助言された。佐智子さんは胃ろうに対し「終末期の延命治療」というマイナスのイメージがあった。でも正直、胃ろうの知識はなかった。

とりあえず進さんの訪問診療をしていた在宅医の赤羽重樹医師（54）に相談してみた。赤羽医師はクリニックで、胃ろうに使うチューブなど器具を実際に示し、使い方を説明した。栄養剤の値段も教えた。「怖いことは全然ありません。我々スタッフが全面的にサポートします」「佐智子さんは、やれるところまでやらないと気が済まない性格でしょ？ やった方が、後悔は少ないと思いますよ」と助言してくれた。

佐智子さんは、2時間ほど説明を聞いた後、「先生、（胃ろうを）お願いします」と言っていた。心から迷いは消えていた。

胃ろうの管理は、決して楽ではなかった。1日3回、栄養剤と水を1時間半ずつかけて注入した。その間は、目が離せない。下痢になったときのおむつ替えは大変だった。

それでも佐智子さんは「胃ろうにして本当に良かった。夫婦の時間を取り戻せた」と振り返った。進さんの単身赴任で離ればなれの生活が長かったからだ。一方で「未知の世界だからできた。『もう1回』はありません」とも話していたのが、印象に残った。結局思ったほど進さんの状態は改善せず、最後の1年間は「生かされている」という感じだったという。

佐智子さんは今、赤羽医師のクリニックに月1回ほど通う。自分の健康チェックが名目だが、夫を介護した際の苦労話などになることが多いという。「赤羽先生は、苦労を分かち合った同志、という感じですね。ある意味、自分の子どもに対する以上の強い信頼感がある」

■父親の意思を尊重

一方、父親（享年83）に胃ろうをしない決断をした長女（51）＝逗子市＝の話は、聞いていて身につまされた。2年半ほど前、逗子市内の喫茶店で2時間近くお話を伺った。脳梗塞で入退院を繰り返す。あるとき、食べ物が肺に入り肺炎で入院。医師から「もう口から食べるのは難しいでしょう。胃ろうにするか、家族で決めて下さい。胃ろうにしないと、あと2週間ぐらいでしょう」と言われた。胃ろうをすれば、もっと長く生きられる。

父は通常の会話は厳しい状態だったが、判断能力はあった。母親（80）と長女は、ベッド上の父親に「お父さん、胃ろうの手術する？」と尋ねると、黙って首を横に振った。

03年に脳梗塞で倒れた際も、胃ろうをつくる話があったが、拒否して口から食べる訓練を続け、食べる喜びを取り戻していた。「10年間、食べる喜びだけで来た。その楽しみを奪って生き続けることが、本人にとってどうなのか」。長女は胃ろうにしないことを決断し、兄（55）に伝えた。当初、兄は反対したが、最終的には本人の意思を尊重してくれた。

取材当時、「父の決断を尊重してあげられた喜びの一方、『これでよかったのかな』という思いもある。でも、私がすべてを背負うしかない」と話していた。今もその気持ちは変わらない

いのか、電話で聞いてみた。

「老衰死」に関する書籍を読み、「心のふた」がとれたのだという。余分な点滴はせず、自然に逝かせる特別養護老人ホームの話などが採り上げられていた。「もしかしたら私は、父を餓死させたのかもしれない、という思いもあった。でも自分のとった判断は間違っていなかったと思え、気持ちが楽になった」。今では、母親とも「あれでよかったんだよね」と話すという。

「心のふたがとれた」と聞き、私自身ほっとした。2年半前に取材したときは、正直お話を聞いているのが、つらい部分もあったから。

■患者家族への助言

自分自身もいろいろ考えなければいけない年代である。今年の正月に実家に行った際、まさに両親、兄と延命治療の話をした。両親は2人とも明確に「胃ろうはしない」と言い切った。その意思を尊重しようと思う。ただ、「その時」に本当にそうできるか、正直不安もある。それこそ、いつも自分が記事で書いている「家族の覚悟」が必要なのだと思う。

赤羽医師は、患者家族には①経済力②家の造り③夫婦・家族関係などを勘案して、助言するという。「全く後悔がない、ということはない。つくると『自分が罪悪感から逃れるためにやった』と思い、つくらないと『死期を早めてしまった』などの思いを抱いてしまう。どちらがより後悔が小さいか、で判断するしかない」。だからこそ、大垣さんのように「その後」をフォローするのだという。

2025年に向け、「胃ろうの選択」を迫られる高齢者は増えてくる。「その時」が来る前に、家族や医師らと十分に話し合っておくことが大事だと思う。少しでも後悔の少ない選択をするために。

(次回は3月9日に配信の予定です) (佐藤陽)



佐藤 陽(さとう・よう) 1967年生まれ。91年朝日新聞に入社。大分支局、東京本社生活部、横浜総局などを経て、現在、東京本社Reライフプロジェクト主査。ここ15年ほどは、主に医療や介護をテーマに取材してきた。「迫る2025ショック」の新聞連載と連動し、医療系サイト・アピタルでは、在宅医療・介護のノウハウを伝える動画、「迫る2025ショック with you」(<http://www.asahi.com/apital/channel/withyou/>)に出演。早稲田大学理工学部非常勤講師も務める。

著書「日本で老いて死ぬということ」の購入は、http://publications.asahi.com/ecs/detail/?item_id=18159 から。



ご感想やご意見をお待ちしています。お名前をご明記のうえ、下記のアドレスにメールでお送りください。ご投稿を紹介させていただくこともありますので、匿名希望の方はペンネームをお書き添えください。

朝日新聞デジタル編集部「マンスリーコラム」係

kaigotoukou@asahi.com 

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.